報　告

野外活動における情報通信機器の活用

── 第 14 回日本ジャンボリーでの実際 ──

Implementation of the Outdoor Recreation Communication System at the 14th Nippon Jamboree

黒　澤　岳　博*(1)
KUROSAWA, Takehiro

はじめに

2006（平成 18）年 8 月 3 日（木）～ 8 月 7 日（月），石川県珠洲市で，4 年に一度開催されるボーイスカウトの全国大会「第 14 回日本ジャンボリー」（以下 14NJ）が開催された。合計 22,000 人が 1 週間のテント生活を行うこの大会では，大会公式サイト(2) 以外にいくつかのサイトがリアルタイムで情報提供を行った。

本稿では，この大会期間中に活発に更新されたサイト・ブログを紹介しながら，野外活動における情報通信機器の活用の実際について検討したい。

1. 大会の概要

1-1　ジャンボリーと大会テーマ，会場

日本ジャンボリーは，海外からの参加者を交えて全国のボーイスカウトの代表が一堂に集い，4 年に一度行われる，国内で最も大きな国際キャンプ大会である。この大会のプログラムは，ボーイスカウトが各地で行っている普段の野外活動を通じて培ったものをもとに，キャンプ生活を通して生きる力を育み，スカウトの自発活動を促して，地域社会におけるスカウト運動の一層の発展と躍進をめざすものとなっている。

大会テーマを「『風の不思議を突っ走れ！』── Scouts Wave 100 ──」と定めた。大会会場となった能登半島では，古く万葉の時代より，海からの風を「東風」（あいの風）と呼び，この風に乗って大陸の文化や人々が珠洲の地に渡ってきたと伝えられて，能登の豊かな風土を育み，独自の文化

* 城西大学経営学部非常勤講師

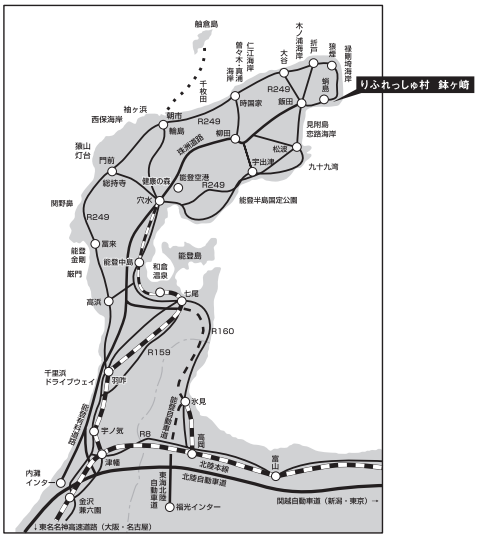

図 1　会場の位置

図 2　場内配置（山口県連盟 14NJ 情報から）

を育ててきた風だと，言われていることによる。

会場となった石川県珠洲市蛸島町にある「りふれっしゅ村 鉢ヶ崎[3]」は，珠洲鉢ヶ崎リゾートゾーン整備事業等により能登半島最先端の珠洲市に整備された珠洲の自然を満喫できる充実したアウトドアリゾート地で，この地域全般を利用して大会が開催された。

上記図 2[4] のうち，テントに記載された各色の番号で示されたは地域はは各サブキャンプを示しており，それぞれのサブキャンプには参加者・運営スタッフ合わせて 2,000 人程度が生活していた。

1-2　大会期間と参加者，組織

大会期間は，開会式が平成 18 年 8 月 3 日（木）夜，閉会式が 8 月 7 日（月）夜に行われるが，会場は 8 月 1 日（火）午後に開場，8 月 9 日（水）午前に閉場となっていた。

14NJ には表 1 のとおり，22,000 人が参加した。

表 1　参加区分及び参加人数

参 加 区 分	参 加 人 数
(1)　参加隊（ボーイスカウト及び関係指導者）	40 人×400 隊＝16,000 人
(2)　奉仕隊（ベンチャースカウト及び関係指導者）	26 人× 50 隊＝ 1,300 人
(3)　県連盟派遣団本部要員	300 人
(4)　サブキャンプ（SC）本部要員	120 人×9SC＝ 1,080 人
(5)　ジャンボリー本部要員	1,500 人
(6)　外国派遣団・調整人数	1,820 人
総　　計	22,000 人

表 2　参加隊の参加区分と年齢等

役　　務	人　　数	備　　考
隊　　長	1 人	25 歳以上の WB 研修所 BS 課程[5] 修了者
副　　長	2 人	20 歳以上：WB 研修所終了者が望ましい
副 長 補	2 人	18 歳以上の指導者講習会修了者
隊　　付	2 人	18 歳以下の 1 級[6] 以上のスカウト
上級班長	1 人	同上に加え班長等経験 6 月以上
スカウト	8 人×4 個班＝32 人	平成 18 年 4 月 1 日現在 2 級以上の BS（基本的には中学生）
計	40 人	

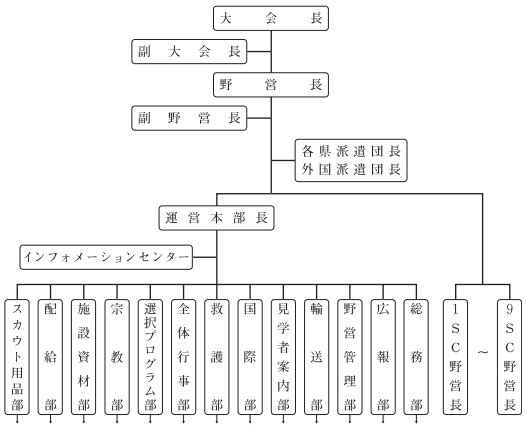

図 3　大会運営組織

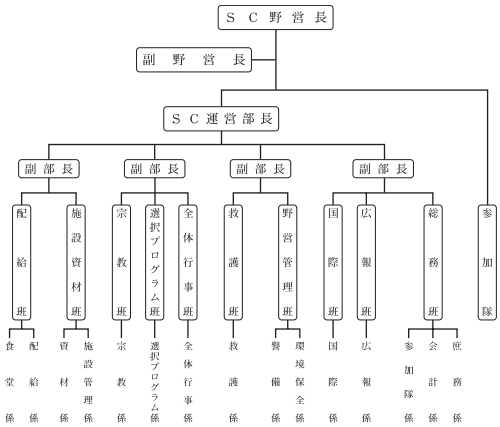

図 4　サブキャンプ組織

ジャンボリーの「参加者」は参加隊として参加する中学生（以下スカウト）で 12,800 人となっており，それ以外はすべて生活・活動の面から参加スカウトをサポートし，大会を運営するスタッフとして活動する。多くの参加隊は 8 月 2 日に入場し，8 日に出発するという日程で 6 泊 7 日，表 1⑵以下の運営運営スタッフは基本的に 1 日前に入場し準備することとなっていたため，7 泊 8 日をテント等により野営した。

1-3　大会運営に関する課題

22,000 人が 1 か所に集まり，一つの「街」を作り上げるジャンボリーにおいては，その会場を確保するのが難しい。これまで，自衛隊演習場[7]，海辺の埋め立て地[8] など様々な会場を確保してきたが，いずれにしても日本全国から集まることになるため，会場入りまでに数時間かかることが珍しくない。埼玉県から今回の会場までは，バスで 9 時間程度かかる行程であったが，ボーイスカウトの全日本大会である日本ジャンボリーにおいては，このようなことは珍しいことではない。

自宅から遠隔地でのキャンプにおいては，これまでは，保護者としては「出て行ってしまったら最後，安否を確認する方法がない」と言うのが現実であった。これは日本ジャンボリーなどの大会だけの話ではなく，ボーイスカウトに限ったことでもない。一般的に長期キャンプを実施する場合は同様であり，保護者の心配や「元気でやっているのか」と言った漠然とした不安を解消する方法がなかった。

また，日本ジャンボリーなどの大きな大会では，会期中に大会の様子をリアルタイムに伝える方法は，新聞などマスコミに頼ることがある程度可能であるが，概要や要人参加などが報道される程度であるため，参加するスカウト達の様子を伝える方法は基本的にはなかった。

野外活動において情報通信機器を利用することが可能となった場合，このような問題を解消し「『大会参加者』と『参加していない者』のコミュニケーション」について検討することができることになる。

2. 大会期間中の情報提供

前項のとおり，これまでは，スカウトの保護者や指導者の家族が携帯電話で直接連絡するか，日本ジャンボリーにおいては，各サブキャンプ本部に設置された大会専用電話で連絡をする以外に連絡を取る方法がなかった。

自宅にいる保護者に対して情報提供することで，キャンプに対する不安を取り除いてもらうことは，ボーイスカウト等野外活動においては，昨今大変重要となっている。

14NJ では，この課題に対応するためいくつかの試みが行われた。本章では，①情報提供の対象者と，②使用した情報通信機器，に注目し，この試みを紹介する。これら二つを確認していくことによって，どのような条件が達成されれば，今後の野外活動における情報通信機器の活用の一つとして，「『大会参加者』と『参加していない者』のコミュニケーション」をより効果的に行うことができるかを検討できると考えられるからである。

2–1　ボーイスカウト山口県連盟「14NJ 情報」

まず最初に，ボーイスカウト山口県連盟「14NJ 情報[9]」（以下「14NJ 情報」）を紹介する。

このサイトは，ボーイスカウト山口県連盟 Web 管理者である蔦川常慶が，大会期間中会場から情報掲載していったものである。14NJ では蔦川は，第 7 サブキャンプに所属する山口県連盟派遣団本部員として，山口県連盟所属の参加スカウト・指導者に対するサービスとして入退場時の交通手段の確保などを行うことを主務としながら，山口県連盟 WEB サイトの一部として 14NJ 情報の提供を行った。

1）　対象者

このサイトでは，情報提供の対象者を次の通り当初から明確に定めていた[10]。

情報提供の対象者

14NJ 情報サイトの大会前，大会期間中，大会後の情報提供対象者は次のとおりとした。

- 14NJ 大会期間前：14NJ に参加する隊指導者（参加スカウトの閲覧を少し考慮）
- 14NJ 大会期間中：14NJ 参加者を送り出した留守宅及びその関係者（留守部隊）
- 14NJ 大会期間後：特定しない

このサイトにおいては，当初より期間中の情報提供の対象として「留守宅及び関係者（留守部隊）」と定め，参加スカウトの様子をできるだけ詳細に情報提供すると共に，掲示板等の機能を利用し，留守宅の保護者や留守を預かる地元指導者などとの情報交換を行った[11]。

図 5　ボーイスカウト山口県連盟「14NJ 情報」

また，大会期間前に隊指導者に対し大会会場の状況，運営に関する情報などを提供することで，参加スカウトがより快適な生活を確保できるよう配慮している[12]。

14NJ 以前にも事前・会期中の情報提供の試みはいくつか見受けられる[13] が，基本的には「会場からの活動紹介」程度の情報提供となっていたことから，事前の参加者への情報提供及び期間中の留守宅等への情報提供といった「14NJ 情報」での試みは画期的なものである。

2） 使用した機器及び電源

「14NJ 情報」で，蔦川は次のような機器を使用して，会場からリアルタイムで情報提供を行ったと記録している[14]。

1. 会場で使用した情報発信関連機器

［ページ作成及びネット接続］

・コンピュータ：IBM　ThinkPad G41

・インターネットへの接続：NTT Docomo の「FOMA P2403」（上り 64 kb：下り 384 kb）[15]

［電源の確保］

・昼間電源及び夜間電源の蓄電：ホンダ製低騒音型発電機（500W 型）

・夜間電源の確保：自動車用 12V バッテリー（F51 型：Ah＝96）

12V／24V 対応型全自動バッテリー充電器

DC 12V→AC 100V 変換インバータ（250W 対応型）

14NJ は 2 万人以上が参加する大規模なキャンプ大会であったため，参加スカウトの生活を担当する参加隊に対して，生活関連サービスを提供するサブキャンプの運営を行う「サブキャンプ本部」には電源が確保されていた[16] ことから，上記のような環境を整えることができた。

次項で述べるが，参加スカウトと寝食を共にする参加隊では，発電機を使用することができなかったため，別途情報通信機器の電源を確保する必要があった。

2–2　14NJ-Information for AGEO[17]

「14NJ-Information for AGEO」（以下，上尾ブログサイト）は，ボーイスカウト埼玉県連盟上尾地区コミッショナーである須賀聡が会場内から情報掲載していったものである。須賀は，参加隊指導者である第 3 サブキャンプ埼玉第 9 隊副長として，参加スカウトと寝食を共にしながら会場内から情報を掲載していった。

1）　対象者

上尾ブログサイトには，サイト冒頭に「第 14 回日本ジャンボリーに関する上尾のスカウト，また保護者向けの情報を提供するブログです。」と掲示されており，当初より保護者に対する情報提供も考えていたことがわかる。

須賀は，筆者からの質問に対し，次のように回答している[18]。

質問：保護者への通知はどのようにしましたか？

回答：保護者会やスカウトへの連絡で絶えずアドレスを連絡し，特に深夜のバスの帰りの時間は，ここで連絡する，と通達しましたので…。

また，保護者会では「実況」を宣言したためとにかく Live に近い形で，保護者の方々が見るたびに，何か新しくなっている，というステータスが必要だったため，とにかく更新の連続，それも，「今，こういう状況になっている」というお知らせをしたい，と思いました。

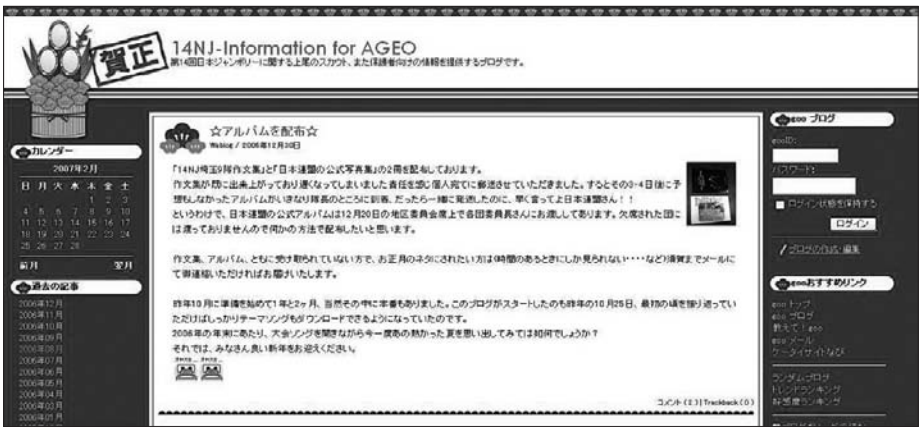

図 6　14NJ-Information for AGEO

上尾ブログサイト開設当初から「保護者に対する情報提供」を考えていた須賀は，大会前に行われる事前の保護者会等で上尾ブログサイトの存在を PR し，保護者との連絡をこのブログサイトで行うことを通知していた。これにより，会期中の大会会場内での様子に加え，深夜到着が想定された帰着時間に関する情報提供も意図していた。

2）　使用した機器及び電源

使用した情報通信機器について，須賀は筆者からの質問に対し，次のように答えている[19]。

Q：どのような機器を使いましたか？

→ただの FOMA です。ただ，予備バッテリーを 8 個フル充電して持参しました。乾電池による充電はサブ的に使いました。

Q：事前・期間中でどのような設定をしましたか？

→上記でも申し上げたようにバッテリーです。これにつきます。

NTT Docomo 社の FOMA 回線を使用した携帯電話機のうち，須賀がどの機種を使用したかは定かではないが，いずれにしても上尾ブログサイトの更新・情報掲載には「携帯電話一つのみ」であることがはっきりしている。上尾ブログサイトの大会会期中の記事は，全て携帯電話一つで更新されていた。

埼玉第 9 隊は，8 月 2 日に地元の埼玉県上尾市を出発し，8 日に帰着しているが，この間の記事件数は合計 125 件，最も記事が多かった 6 日には 29 件の記事が掲載されており，これを全て携帯電話で行っていることを考えれば，携帯電話を使える環境があれば大会会場からの情報提供は十分可能であると結論づけて差し支えないと考える。

3. 野外活動における情報提供の意義

前章で見た二つの web サイト・ブログの例から，野外活動における情報機器活用と情報提供の意義について検討してみたい。

3-1　野外活動における情報機器

黒澤（2006）は「野外活動における情報機器活用のポイントと課題[20]」として，①無線であること，②電源の確保，③（参加者数等）規模への対応，をあげている。今回あげた 2 つの例では，これらの条件をクリアして，活動状況をリアルタイムで報告するだけでなく，地元と現地とのコミュニケーションを取ることに成功している。特に上尾ブログサイトでは，携帯電話一つで情報提供をこなしていた。

このようなコミュニケーションは，今回確認できた範囲では「成人同士＝指導者と保護者，または指導者同士」と言う形でしかないが，近い将来は「参加しているスカウトと参加できず地元に残ったスカウト」の間で連携することが可能となるであろう。実際，携帯電話を持ち込んだ参加スカウトも少なくないし，運営上，成人指導者による携帯電話での連絡はある程度制限されながら[21]も，特に問題なく行われていた。

また，携帯電話の機能が進み，通話・電子メールなど「一対一」で対応する機能だけではなく，

「多対多」のコミュニケーションをできる WEB 閲覧が可能になったため，参加者が増えても対応が可能になっている。

予備電池などにより電源さえ確保すれば，上記の①，②，③をクリアすることができる携帯電話は，野外活動における情報機器活用の重要な要素となることは間違いない。

3-2　情報受信者の存在

22,000 人が参加する日本ジャンボリーも，18 万人の加盟員を持つボーイスカウトでは，すべてのスカウト・指導者が参加できるわけではない。このため，ジャンボリーに参加できないスカウトをつれて，わざわざ会場に見学に来る例も多い。

今回のとりあげた事例では，それぞれ情報提供対象者を保護者と定めている。「14NJ 情報」で，蔦川は会期前後のアクセス件数を以下図 7 のように取りまとめ，その図をもとにコメントを加えている[22]。

上記のアクセス件数と蔦川のコメントを見れば明らかだが「14NJ 情報」のサイトには，期間中のアクセスが通常の数倍に増えている。参加者は基本的にはインターネットにアクセスできない環境であったことを考えると，保護者など「地元の留守を守る者」が「14NJ 情報」を見ていたことは明らかだろう。

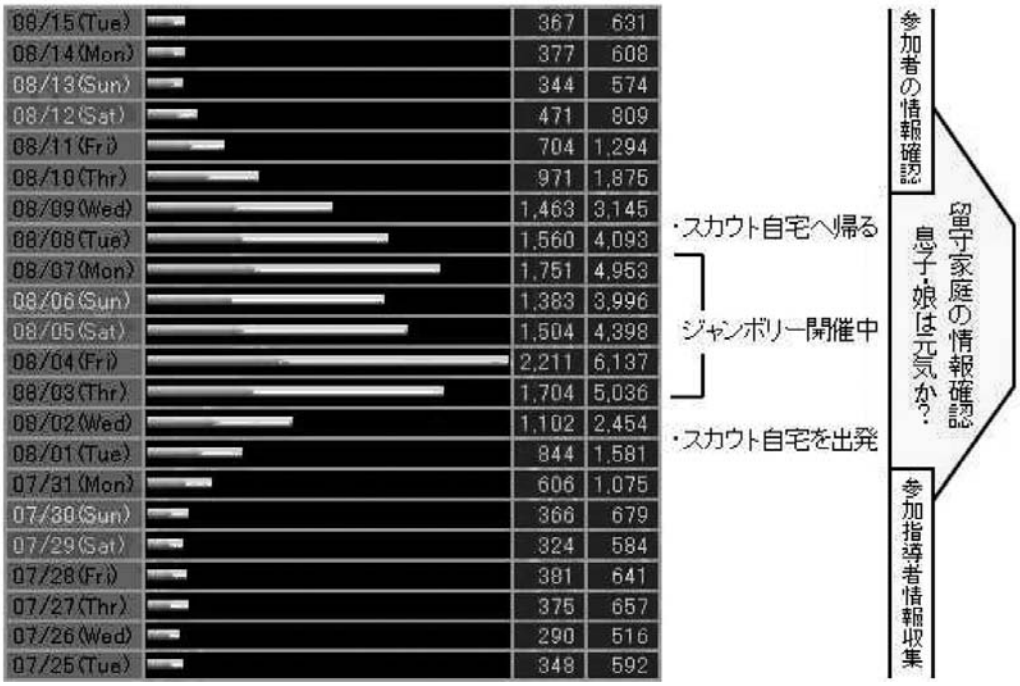

図 7　「14NJ 情報」来訪者数・アクセス件数

また，上尾ブログサイトについては，それぞれの記事に保護者からのコメントがついているものも多く，注目を受けていたことは間違いない。テントを撤収し帰り支度をする8月8日の記事には，運搬費用に関して，保護者に対するお願いの記事[23]があり，5件のコメントが各保護者からついていた。このコメントはそれぞれ「お願い」に対する回答となっており，派遣隊指導者と保護者の間で，ブログサイトを利用したコミュニケーションが成立していたことを示している。

3-3　情報提供担当者

今回取り上げた事例では，情報提供を担当したWEB管理者はそれぞれ県連盟派遣団本部員（県連盟WEB管理者）や派遣隊指導者であった。大会運営における所属や立場によっては，情報提供に時間を割くことが難しい場合があるが，それ以上に情報提供するための「情報」を持っているかどうかと言うことが重要となる。

例えば，「14NJ情報」では，県連盟派遣団本部員の立場から，山口県連盟からの参加隊の状況を把握する必要もあり，山口県連盟からの参加隊に関する情報収集が可能であった。同様に上尾ブログサイトでは，ブログサイト管理者が参加スカウトと寝食を共にしていることから，スカウトの実際の生活を細かに取材することが可能であった。

つまり，取材・情報発信を専門にする広報担当者ではなく，「現場で参加スカウトと一緒に活動をしている」指導者が情報提供を行ったことで，より身近な実状を情報提供できるようになったことは重要である。特に上尾ブログサイトでは，派遣隊指導者が携帯電話一つで画像も提供していることから，参加者により身近な存在が情報発信できることを確認できる。携帯電話で情報発信が可能であるならば，今後，参加スカウトが直接情報提供することも技術的にはすでに可能であることが明らかである。

おわりに

今回は，14NJのような大規模な大会やボーイスカウトのキャンプでの情報機器の活用について検討したが，これは，ボーイスカウトのみならず，全ての野外活動で活用可能であると思われる。

例えば，民間野外活動事業者においては，その事業の参加者の保護者に対する情報提供を検討することができ，より「信用」を得ることができると思われる。また，WEBサイト・ブログサイトへの画像等情報掲載による「記録機能」を利用すれば，次回参加対象者に対するPRとしても使用可能になるはずである。デジタルカメラ・携帯電話などで動画を撮影し掲載すれば，よりいきいきとした活動の実際を保護者などに見ていただくことも可能となろう。

これまで，野外活動においては情報通信機器の活用はあまり検討されてこなかった。今回の整理により，参加者または参加者に身近な運営者が工夫をすることで，「参加できなかった者」や，保

護者など「参加者の状況を知りたいと考えている者」に対して有効な情報提供を期待できる。

〈注〉

（1）　ボーイスカウト埼玉県連盟 Web 管理者・第 14 回日本ジャンボリーには，第 3 サブキャンプ国際班班員として参加

（2）　第 14 回日本ジャンボリーについては，次のサイトに詳細が掲載されている。http://www.14 nj.org/
なお，当初の予定では，この公式サイトも大会期間中，随時更新する予定であったが，会場内のネットワーク環境の状況が悪かったため，大会終了後に更新が行われた。公式サイトは「大会期間中のジャンボリー会場内での活動の PR」が主な内容であったため，本稿では特に検討の対象としていない。

（3）　図 1 の位置。なお，以下の図は，特に表記がないものは 14NJ 基本実施要綱より引用している。

（4）　山口県連盟 14NJ 情報から引用

（5）　ウッドバッジ研修所ボーイスカウト課程の略。ボーイスカウトの隊長の資格を得るために必要となる 3 泊 4 日の研修。ボーイスカウト課程の場合は，テントを使用した野営で行われる。

（6）　ボーイスカウトの進級章。初級，2 級，1 級と進級し，中学生年代のボーイスカウトでの最高の章は菊章。

（7）　第 6 回（1974 年）北海道千歳原など

（8）　第 13 回（2002 年）大阪市舞洲地区

（9）　URL は次のとおり。
http://www.scout-yamaguchi.net/14NJ/

（10）　下記 URL のうち「14NJ『能登ぶらぶら情報局』回想記」として記録している。
http://www.scout-yamaguchi.net/14NJ/kiroku/kiroku01_P.htm

（11）　下記 URL において，大会直前に開設されたが，2006 年 10 月に閉鎖されている。
http://www.scout-yamaguchi.net/14NJ/Blog/Blog_00 P.html

（12）　各県連盟は，それぞれ工夫を凝らして情報提供を行っていた。
例　埼玉県連盟：http://www.scout-saitama.jp/14nj.htm
北海道連盟：http://www.douren.org/~nj14/

（13）　例えば，黒澤（2006）の「第 8 回埼玉カブラリー」におけるブログサイトなど。
http://8 scr.seesaa.net/

（14）「14NJ 情報」内下記 URL
http://www.scout-yamaguchi.net/14NJ/kiroku/kiroku04_P.htm

（15）　なお，インターネットへの接続については，蔦川は 2006 年 6 月末に現地で事前調査を実施し，NTT Docomo の FOMA 回線が利用できることを確認している。また，Willcom の Air EDGE（エア・エッジ）を予備回線として確保したと下記 URL に記述している。
http://www.scout-yamaguchi.net/14NJ/kiroku/kiroku01_P.htm

（16）　蔦川の記述によると，蔦川の所属した第 7 サブキャンプでは，夜間電源は，取り決めにより，発電機の使用が 21：30 までとなっていた。その後の作業用の蛍光灯照明，パソコンの電源及び夜明けまでのパソコン通電用の電源を確保するため昼間に蓄電したとしている。なお，この夜中の通電は，結露防止のため PC は 24 時間稼働させたことによる。14NJ 会場は結露が著しく，筆者の宿泊用テントでも，朝起きるとテントの内側が結露し，毎朝したたり落ちて来た。

（17）　URL は次のとおり。
http://blog.goo.ne.jp/ndj-radio

（18）　筆者が運営するブログサイト「スカウティング研究センター事務局の日記（http://riics.seesaa.net/）」におけるコメントとして，次の URL のページに記述されている。
http://riics.seesaa.net/article/22301373.html

（19）　（18）に同じ

（20）　原文の見出しとしては「4．野外活動における活用のポイントと課題」

（21）　携帯電話の使用については，事前に次のような連絡が行われた。
・参加スカウトの携帯電話使用については，各参加隊で指導する。

・電波の届く範囲には，地元の皆さんが住んでおり，携帯を使っているため，過度の使用は控えたい。
・大会の業務で使う携帯電話にも影響を与えることから，積極的な使用は控えてほしい。

（22） 図 7 は次の URL から引用
http://www.scout-yamaguchi.net/14NJ/kiroku/kiroku05_P.htm

（23） 記事については，次のとおり。
http://blog.goo.ne.jp/ndj-radio/e/2aa5251fa97dc907f161f876662d23ce

参考文献

黒澤岳博（2006）“野外活動における情報通信機器の可能性 ── 埼玉カブラリーにおける情報通信機器利用報告と今後の展開 ──” 城西情報科学研究第 16 巻第 1 号

㈶ボーイスカウト日本連盟（2004）“第 14 回日本ジャンボリー基本実施要領”

（Received Feb. 22, 2007）